

鹽釜

わが舟は音を立てつつ海なかに牡蠣養へるち
かくをぞ行く

ひゆうひゆうと寒さ身にしむ午後四時に松島
を出でつ小舟に乗りて

松島の海を過ぐれば鹽釜の低空かけてゆふ焼
けそめつ

あかあかと夕棚雲はしましくは身に沁むまで
に棚びきにけり

冬の日にはや暮れやすく八十島のかげははる
かに浮かぶが如し

海の雲はれそめしかば鹽釜の舟の帆柱のあき
らけく見ゆ

鹽釜の浦にうつろふくれなるの夕棚雲を妻と
見て居り

朝舟のするどき音も世の常の音とおもはむ旅
を來りき

鹽釜に一夜あくればおもほえず船の太笛がし
きりに鳴れり

鹽釜に一夜ねむりてあかつきのもろごゑきけ
ば諍ふごとし

鹽釜の神の社にまうで來て妻とあらそふこと
さへもなし

鹽釜の社やしろに生おふる異國ことくにの木この實みをひろふ蒔まか
むと思もひて

みちのくの北へわたらふ山脈やまなみに雪ふるを見て
旅を來にけり

鹽釜のなぎさに魚うをの市いちたてば貧ましく生いくる人
も集つどへる

鹽釜の港の岸に人むれて入りくる小舟待つも
親しも

あわただしき生業なりはひに生きてあり經ふれば妻と旅たび
路ぢに寝ぬるもしづけし

みちのくのかげどもの國旅ゆけば冬といへど
も光あかるし

仙臺

人力じんりきに乗りて仙臺の街を見つ異國ことくにのまちに入
りしごとくに

いにしへの旅ゆく道は國分町くにぶんちやうより青森街道あおもりかみだうに
なりたりしとぞ

仙臺の街はなつかしをりをりは古りたる街と
おもひをれども

われいまだいとけなくして仙臺の街こほし
しことしおもほゆ

この城に吾も一たび來りつとかへりみむか記
憶も幽なつかかになりて

冬 霽

こがらしは一日吹きしきつたひくる衢ちまたのひび
き常なかりけり

うつそみの國くにと國くにとしあひむかふ心せまりて
年あけむとす

むらがりて銀座ぎんざをありく人みればなににかく
のごとく人ゆたけきか

うづだかく臥ふし所に書ふみをつみをりて二月きさらぎこなた
讀むこともなし

あかつきのいまだ暗きにはかなきや八木やぎぶし
の夢ゆめみて居たりけり

北平ぺいびんの旅をぞおもふ日もすがら腹はらあたためき
下痢げりをこらへて

にござることなく丘かのむかうに日没ひぼつして張學良ちやうがくりやう
の軍樂ぐんがく鳴りき

狂者きやうじゃらをしばし忘れてわがあゆむ街まちには冬の
霰もやおりにけり

春さむく痰喘たんぜんを病やみをりしかど草くさに霜ふり冬
ふけむとす

掘割ほりわりのほとりを來つたちまちに岩野いはの泡鳴はうめいを
おもひいだせり

覺悟かくごしていでたつ兵へいも朝なゆふなにひとつ寫しゃ
象しやうを持つにはあらず

蛇へびを賣る家居いけのまへにしばらくは立ちをりに
けりひそむ蛇へびみて

わが病やまひ全またけく癒いえてこもるとき命いのち過すぎにし兄あに
を悲しむ

ひいでたる心もちて居りしかど兄は六十むそぢの
よはひ越えずき

屋上園

庭にはくまにひいづるを見てあはれみし擬ま寶珠ほうしゆな
べて霜がれにけり

八層はつそうの高たかきに屋上おくじやう庭園ていゑんありて黒豹くろひょうのあゆむを
人らたのしむ

あまつ日は紅あかくにごりてかがやかず家いえむらの
したに落ちゆくらしき

ちちの實みは黄きになりて落つここにして物のほ
ろべと火ほむらは燃えき

わが眉まゆはうごかざりけりむれてゆくをとめ寐ね
よげと人いひしかど

銀杏

いでふの實みの白きを干ほせる日の光ひかりうつろふま
でに吾は居りにき

わたつみのさかまくも炎ほのほもえたつもおのづか
らなるものをおもはむ

氣ぐるへる人をまもりてくやまねど山河こえ
む時なかるべし

八年まへの火事をおもへば心いたし一時間
にして皆もえたりき

人の名を忘れがちにて明けくれぬ人の名をお
もひ出さむとして苦しむ

挽歌

あからひく頬の童子とことはに消ゆること
なしよみがへりこむ 近藤尙徳君

199
曉星の少年の子のうたふこゑ聞く朝明ぞ悲し
かりける

昭和七年

る 満洲まんしゅうにいのち果てたる兵士へいしらをおもひつつ居ゐる
夜よるは寒さむしも

にしわれ生きむとす
おしなべて戦たたかひのごとくせまりけるきびしき世よ

新春小歌

白霜のむすびわたれる朝まだき胡頹子の若木
を移し植ゑしむ

おとろふる吾のまなこをいたはりて目薬をさ
すしばだたきつつ

朝夕の時を惜しみて春寒きまちのちまたに出
でにけるかも

父母もすでにみまかり我がこころやうやくに
してしづけかるらし

二師團のたたかふ軍のなかにゐてわが村人も
いのち果てたり

浅草の五重の塔をそばに來てわれの見たるは
幾とせぶりか

日ひのあたる縁えんに置きたる幸草さいくさの花みるまでに
今日けふはゆたけし

豊酒とよみきを一ひとつき飲むやわがいのち養やしなふがねと二
つき飲まむ

一ひとり人ゐるわれとおもはず紅くれなゐに咲きたるうめを
めでにけるかも

春の海

むらぎもの心なごみて春はるの海うみのいきほふ浪なみに
われたちむかふ

伊豆いづのうみとどろとどろと白浪しらなみのちる荒磯あらいそべ
に國を思はな

豊さかときかゆるくにの新年しんねんの海べに立ちて
幸さいをねがはむ

沖つかせ寒くし吹けどむら千鳥ちどりなくこゑ聞け
ば心たぬしも

あまつ日のひかりわたつみにかがやきてわが
大王おほきみの御稜威みりつなすかも

紅梅

紅梅こうばいはかなしきいろに咲きにほふあはれかな
しと道ゆきにけり

くれなるの梅の咲きちる野べに來てかなしき
戀をわれは聞かむか

梅の園もとほりくれば五十年の過ぎこしこと
は遠世のごとし

くれなるの梅のふふめる下かげにわれの一世
の老に入るなり

うめが香のきこゆるいへに夜ふけぬわれに言
問ふをとめごもがも

早春

あまのはらあけわたしたる日のひかりあまね
きにわれあゆみ來にけり

いにしへの心たらへる人のごと餅を食ひぬ今
朝のあさけに

何事なにごともあきらめしごとき人を見ずみづみづと
して人歩あゆむはや

冬の野に頬白ほくしろ啼なきぬいそがしき人等ひとらあゆみを
とどめて聞けば

あづさゆみ春はまだきに寒けれど光たむろに
花を咲かしむ

あたらしき年のはじめにいにしへゆ水みづをくま
むと泉いづみにおりつ

くれなるの林檎りんごがひとつをりにふれて疊たたみのう
へにあるが清きよしも

飛行士の勇猛ゆうまうによりてこの夏ごろ太平洋たいへいやうを乗
りきるらむか

春雜歌

あたらしき年のはじめに我おもふひたぶるの
道に生きむは誰か

孤兒 (福田會)

この童子みなし兒といへどふたりの祖父ふた
りの祖母がすでにあるにあらずや

岩波講座「源實朝」を草す

鎌倉のきびしくうごく代にありて殺されし君
うたびとにあはれ

ふゆの夜の更けゆけるまで
實朝さねともの歌うたをし讀め
ばおとろへし眼めや

もの書きつぐわれのうしろにおもほえず月か
たぶきてたたみ聲こゑを照らす

新興短歌

短歌革新の氣勢きせいをあぐる顔ぶれは皆みなわれに會あひ
釋しやくするもののみなりき

いどみくるこの闘たたかひに斥候しやくこうを放たむことをわれ
敢あへてせず

折々

きさらぎの日は落ちゆきてはやはやも氷こほりらむ
とする甕かめのなかのみづ

ほしいままに霜がれわたるわが庭に頬ほほ白しろ來る
を知らで過ぎにき

出で羽はヶ嶽たけにも話さむとこのゆふべ相撲争議
團だんの一いつ室しつに居り

童馬山房近咏

こゑあげてひとりをさなごの遊ぶ聞けばこの
世よのものははやあはれなり

やうやくに老いづきにけりさびしさや命いのちにか
けてせしものもなし

われを悪む人おもはぬにあらねどもこよひや
すらかに臥し居りにけり

まなこ冴えてわれはねむれず巨流河の警戒塹
に雪ふるらしも

空にひびきてニコライでらの鐘鳴るを旅人の
ごとくわれは聞くなり

敵の塹に一氣になだれいりし犠牲勇猛をわれ
も泣かざらめやも 廟行鎮三首

おのが身をほのほになしていのちはてし三た
りの兵を泣きておもはむ

たたかひはただに勝ためととどろきし突撃兵
に生きしものあり

春
雲

ゆふぐれの車房しやぼうより赤きをふりさけし山のう
への火ひろごるらむか

ゆたかなるものにもあるかあまつ雲箱根はらねの山やま
を越えてなびける

しげみより湧きかへりくる山みづの浪に入り
ゆきしあかき鯉くろき鯉

たかむらに春日のてれる伊豆いづのくにや幽かすかに
人は家居いへせりけり

年ふりて山の南みなみの椿つばきの木にあふるるばかり
花はなさく

伊賀上野にて

旅とほく病めるわが子よもろびとのあつきな
さけに今ぞよみがへる

病みてふす子の枕べにわが寝ねどよはに眼ざ
めてころなげかむ

あわただしき心のごとく春ゆきて伊賀の山べ
に霞たなびく

奈良に境ふ山竝とこそ聞きつれど心は悲し行
きがてぬかな

年ふりしいほりに入ればかすかなる音だにも
なし萌ゆる若葉に

春より夏

徳富蘇峰先生古稀賀

とことはにふみのひじりと現うつにはいのちはな
 がく立ちていませり

まぢかくに見まゐらすかなやうつし身の君きみ
 はたふとく老いたまふなり

もえたてるほのほのいろの澄みゆきて君が心
 ぞさやけかりける

左千夫忌（五月二十二日於龜戸普門院）

一とせにひとたびまうで來ることとも忘れが
ちにて生くるさびしさ

澤及昆蟲則聖人歸之

コスモポリイはさもあらばあれ心もえて直に
一國を憂ふる者ぞ

安行吟行 (六月十九日)

この家の木のくらがりに雉子飼へり山のなか
なるくらがりに似む

新京なる八木沼丈夫に寄す

街^{がい}上^{じやう}の石^{いし}だたみ^{だたみ}が朝^{あさ}ぎり^{ぎり}にしめる^{しめる}ころ既^{すで}に剽^{せう}
悍^{かん}の目^め附^{つき}してある^{ある}き居^ゐらむ^{らむ}か

譬^{たと}へていはば精^{せい}子^しのごときか目^めに見^みえぬ個^この
生^{せい}滅^{めつ}ののちにあたらしき國^{くに}は興^{おこ}らむ

おのづから日^ひの要^{よう}求^{きう}の始^し末^{まつ}つけ^{つけ}てなほ今^{いま}ごろ
君^{きみ}は何^{なに}食^くふらむぞ

折に觸れて

軍^{いくさ}の要^{よう}素^そなる士^し官^{くわん}の行^{かう}爲^ゐは單^{たん}に突^つ撃^{げき}戦^{せん}の場^ば合^{あひ}
の^のみ^みと誰^{たれ}か^かい^いひ^ひた^たる

な^なか^かぞ^ぞら^らに音^ねする^{する}雨^{あめ}は^はまた^たた^たく^くま^まに羊^{しやう}齒^だの^のし
げ^げみ^みに降^ふり^りそ^そぎ^ぎけ^けり

伊賀の上野にわが子病みぬといひしとき妻は
われよりも早くいで立ちぬ

美男美女毎日のごとく心中す

心中といふ甘たるき語を發音するさへいま
ましくなりてわれ老いんとす

有島武郎氏なども美女と心中して二つの死體
が腐敗してぶらさがりけり

抱きつきたる死ぎはの適合をおもへばむらむ
らとなりて吾はぶちのめすべし

久保田健次君來書

ハルピンより二十里北に屯すといふみじかき
文も身に沁みにけり

高粱が高くしげりてちかづける土匪のひとり
も見えがてぬとぞ

呼蘭より綏化の線にたたかひつづけてはやふ
た月は経きといふかも

七月三十一日

あつき日のひるは過ぎしにわが庭に山の小鳥
来てしばし鳴きたる

合歡の葉に入りがたの日のひかりさしすきと
ほるこそ常なかりけれ

あつかりし一日くれゆく宵やみに蟬鳴きしか
どつひには鳴かず

子規忌 (九月十八日於青山會館別館)

うすらさむき疊のうへにのぼりくる蟻をさま
たげむものなかりけり

龜の子

この日ごろ實朝の歌にこだはりてあけくれに
けりなにのゆゑぞも

胡頹子の實のくれなるふかくなりゆくをわれ
は樂しむ汗を垂りつつ

おほつびらに軍服ぐんぷくを着て侵入しんにゅうし來きたるものを何なに

龜かめの子の坎あなにひそむとかなしみし時代ときよのごとくわれひとり居り

卑怯ひけつなるテロリズムは老人らうじんの首相しゅしやうの面部めんぶにピストルを打つ

折まに觸ふれたる

革命かくめい者しゃ氣味きみにはしやぎてとほる群衆ぐんしゆの斷續だんぞくを
見みてかへるわが靴くつのおと

おもおもしきさみだれまへのかなしみを山やまに
ひそみし人は知らぬか

あまつ日の白き光のまばゆきに合^あ歡^むの延^のぶる
 はあはれなりけり

ものぐるひのあらぶるなかにたちまじりわれ
 の命^{いのち}は長^{なが}しとおもはず

よひやみの空にひびきて蟲ぞ鳴くこほろぎい
 まだ鳴かぬ草より

しほはゆき昆^{こん}布^ぶを煮つつわれは居^あり暑^{あつ}きひと
 日よものおもひもなし

ひぐらしの鳴くころほひとなりにけり^{ひぐらし} 蛸^{たう}を聞
 けば寂しきろかも

とほき世のひじりのごとく額^{ぬか}ふしてなげきく
 やしまむ時もなかりき

志文内 其一

昭和七年八月十四日、弟高橋四郎兵衛と共に北海道天鹽國志文内なる次兄守谷富太郎を訪ふ

あをあをとおどろくばかり太き蕨が澤をうづ
めて生ひしげりたる

ひと里も絶えたる澤に車前草の花にまつはる
蜂見つつをり

とほく來しわれに食はしむと家人は岩魚もと
めて出でゆきにけり

志文内の山澤中に生くといふ岩魚を見ればひ
とつさへよし

山なかにくすしいとなみゐる兄はゴムの長靴
を幾つも持てり

燕からすむぎ麥のなびきおきふす山やま畑ばたけ晴れたりとおもふ
にはや曇りける

うつせみのはらからみ三人ここに會ひて涙のい
づるごとき話す

雪ふかきころとしなればこの村の驛えき遞てい所じよより
馬うまも櫛そりもいづ

笹むらのしげりなだれしこの澤さばを熊くまは立ちざ
まに走り越ゆとふ

しみじみとみちのく村の話せりまづしく人の
老ゆる話を

人も馬もうづむばかりの太^{ふと}露^{がき}のしげりが中^{なか}に
われは入り居り

ひるの蟲まれに鳴きつつこの道や人の歩^{あゆ}みに
逢ふこともなし

午前二時すぎとおぼしきころほかに往診に行
くと兄のこゑする

ひと寝^ねいりせしかせぬまに山こえて兄は往診
に行かねばならぬ

ゐろり火にやまべあぶりていまだ食はず見つ
つしをれば樂しかりけり

山澤におのづから生ひし桑の木に桑の實くろ
くなりしあはれさ

このあした名のなき山べひとつ越えくら谷に
してしづく落つるおと

おとうとは酒のみながら祖父よりの遺傳のこ
とをかたみにぞいふ

白樺の年ふりにける一つ木の立てるもさびし
北ぐにのやま

志文内 其二

十尺よりも秀でておふる露のむれに山がはの
みづの荒れてくる見ゆ

去蟹と名づくる蟹が山がはの砂地ありくを暫
し見てをり

二里奥へ往診をしてかへり來し兄の額より汗
ながれけり

人かよふ道ありしかば水上へ入りつつゆくに
きはまるらしも

除蟲菊を山奥にうゑて日もすがら年老いし人
ひとりゐる見ゆ

かすかななるものごとくにわが兄は北ぐにに
老いぬ尊たふとかりけり

おのづから白くなりゆきし髭そめて村醫の業
に倦むこともなし

いささかのトマトを植ゑてありしかど青きな
がらに霜は降るとふ

秋の夜よの身に沁ひむごとくさ夜なかと更かけゆき
にけりまどかなる月

さ夜よなかと夜よるは過ぎつつ志し文ぶん内の山やまのうへ照て
らす月のかげのさやけさ

二ふた日かふりし雨あま雲ぐもとほく退そきながらありあけの
つき空そらひくく見ゆ

雨はれてひくむら山にかこまれし村を照らせ
る夏の夜の月

かはかみの小畑せにまで薄荷はろうゑてかすかに人
は住みつきにけり

年々にトマト植うれどくれなるにいまだなら
ねばうらがるるなり

一週に一度豆腐をつくる村を幸福のごとくか
たりあへるかな

この村の八人つどひて酒のみぬ宮城あがたの
ひと秋田あがたの人

わが兄のひとりごとをとめ北ぐにの言になまり
つつ五日したしむ山

志文内 其三

小學のをさなごどもは朝な朝なこの一峠走り
つつ越ゆ

裏土にわづかばかりの唐辛子うゑ居るみれば
やうやく赤し

妻運つまうんのうすきはらからとおもへども北ぐにに
して老おいに入りけり

原始林げんしりんの麓ふもとをすぎてけだものの住みをること
をかつて思はず

年老からすいつつ鴉からすを打ちて食たひしとふ貧ましきもの
のことを語りつ

過去帳かこぢょうを繰くるがごとくにつぎつぎに血ちすぢを
語りあふぞさびしき

夏なつふけし北きたの山路やまぢに小豆畑あづきばたは霜しもによわしと語
りつつゆく

白雲はくうんはかすみのごとくたなびきてこの澤さわなか
に月つきてりにけり

日は入りて薄荷畑はつかばたけに石灰いしほひをまきつつをりし人
もかへりぬ

旅とほく來りてみれば八月はちぐわつのなかばといふに
麥を刈るなり

十字架ある會堂くわいだうも見ずほとけの寺の鐘は一日ひとひ
も聞こえざりけり

志文内より稚内

八月十八日午前七時志文内を發して佐久にむかふ

あかつきの蟬さへ鳴かぬ道のべになごりを惜
しむあゆみとどめつ

ふもとまであをあをしたる薄荷畑のうへにい
つしかも白雲の見ゆ

この谷の奥より掘りしアンモナイト貝の化石
を兄は呉れたり

志文内に五日をるうちひとたびも墓地にゆき
見むと吾はせざりき

五日まへに雨にぬれつつ來し道を日に照らさ
れていまぞ歩める

志文内をいでたる道に桑の實をくひし鴉の糞
おちてをり

天鹽川見えそめしころ谷の入にくろぐろとし
て山はおきふす

阿平志内川のながれにそひてあゆみをりある
時は道ひくくなりつつ

つかれつつ佐久に著きたり小料理店運送店跡
鐵鍛冶馬櫓工場等々

天鹽川のあかくにされるいきほひをまぢかく
に見ておどろくわれは

稚内途上

八月十八日午後零時四十八分、佐久を發して稚内にむかふ

天鹽がはの洪水見つつわが汽車は北へ走りぬ
眠む氣もよほす

小驛のトヒカンベツのあたりより山火事の跡
 すでに見えをる

ととのはぬ山間やまあひを行くわが汽車の窓のガラス
 に蛇うちあたる

兵ひとり中にまじりてどやどやとカブト沼驛
 に人降りゆけり

わたつみのうへかとぞおもふ北空の低きとこ
 ろに雲は屯たむろす

なだらかに起伏おきふし海にいたるまで北見の山の
 焼け果てしあと

峡間はざまよりいづれば遠くさへぎらぬ空そらに續きて
 海近からし

稚内

十八日午後稚内に著き、木谷旅館に投宿す。夜食のち街を遊
逸、萬事めづらし

太々としたる昆布を干す濱にこころ虚しく足
を延ばしぬ

北ぐにの涯とおもへばうち寄する青き海松も
身に沁むがごと

濱べにはすなだる家が屯せり古く住みつきし
人々なるか

はるばるとつひに來にけるこの夕時を惜みて
町を歩けり

公園になり居るらしき此山をかゆきかくゆき
町を見おろす

稚^ち内^{ない}の山に登りてあかあかとわたつみに陽^ひの
落ちゆくを見つ

夕食後散歩にいでて天理教の路傍説教聴きて
ゐたりき

天理教の説教聞けば即ち曰^{いは}く『諸君のやまと魂
を呉れてください』

受持の女中來りてまめまめしくわれのズボン
を寝押にしたり

蚊が居りてねむれずといひ弟は蚤^{のみ}取^{とり}粉^{こな}を火鉢
にいぶす

亞庭丸

やうやくに遠ざかるなり稚内わっかないを船出ふなでして見る
青陸あをくがの山やま 八月十九日

青山の裾に見えゐる部落らくら等は海の潮うしほに浸ひたれる
ごとし

海峡を船わたりゆく時にして東北ひがしきた晴れて南西みなみにし
くもる

おもおもと曇くもりのしづむわたの原はらかりがね一つ
鳴くもきこえず

朝かせの吹きぬし港船出して曇くもりれる海を北へ
ぞむかふ

海の上に鷗かもめむれつつ浮ける様さまたまたま見えて
我船は行く

樺太が雲の上よりあらはれぬ何かかたまりし
ものごとくに

大泊おほどまりの山見えそめてかはるころ旅なつかしく
おもほゆるかも

眞岡

船に乗りて海をわたれば半日はんじちの旅といへども
心あやしも 八月十九日二十日

係戀けいれんに似しころもて樺太の原始林をただ空
想せりき

山火事の煙のために空暗くその時午後三時に
は灯つけしと

平原を河の流れて行くが見ゆ浅岸にして水は
あらしも

花原に限も知らに續きつつ豊原近く日は暮れ
むとす

白樺の太樹ならびて立つ見れば露西亞人等が
植ゑたるならし

午後九時ごろ西海岸にちかづきて高山つづき
ただに黒々し

樺太の真岡の町に目につきし「凱旋どんぶり」
とそして「謎の鍋」

盆をどりありしと聞けど旅づかれ海岸通まで
も行かずも

とある街の角に來し時むくむくと朝井の水が
あふれて居たり

日のいづる前に來れば中學生小學生もまじり
海の魚釣る

濱べより見あぐる丘に家並たち異國らしきお
もかげもあり

天つ日は裏の山よりいでつつあり忽ちにして
海を照らせり

すかんぼなども交りて樺太の港の岸に青くさ
生ひぬ

真岡の濱の鮭干場をもとほりて旅遠く來しと
おもほえなくに

發動船今いでゆけり沖合に船をならべて魚つ
るらしも

船はつる港をそれて突堤に近く山ほどの昆布
乾したり

この町の裏山つづき立派なる建物あり中學校
などもよし

まもり來しわがまぼろしは無くなりつ樺太の
やま火に燃えしかば

心の歎きなどいふことの度を越えぬ山に燃え
たる火のあとを見て

豊原

かすみつつ高山の見ゆげん原始林しげんしげりてゐたる
ころしおもほゆ 八月二十日二十一日

汽車中の話樺太神社舊市街農場ロシア人墓地
山火事

鈴屋山鈴屋川とふ山河の名さへいつしか云ひ
馴るるらし

町ゆきて貝の化石の佳き見れば皆たわやめの
ものにぞありし

豊原にひと夜を寐たり庭に降る雨見てをれば
京都あたりにゐるごとし

露西亞人の造りし家も残り居り日本人は其を
参考だにせず

住みつきて業にいそしむ人々に逢ひつつ旅の
心は和ぎぬ

おひおひに土地草木も日本らしく整理され行
くがかすかに目立つ

小沼こぬまに来て養狐場やうこぢやうに養はれる銀黒狐ぎんくろぎつねいくつ
も見たり

食物を興ふるときに狐等は實に驚くばかり吠
えける

いろいろとこまかき用意話しながら「神經動物」
といふ語を用ゐたり

狐等に交尾せしむることさへも一いっの技ぎ術じゆつといふを聞き居つ

麪ほ包へを賣るロシア人等も漸くに小さき驛へ移りゆくところ

夜寒にしなるらむ頃とおもはねど鳴く蟋蟀のこゑも聞こえず

高麗丸

長旅ををはれるごときおもひもて南へむかふ船にわが居り 八月二十一日雨

わたつみに雨は降れどもわが目め路ぢにノトロ半島見ゆシレトコ半島見ゆ

行ゆきの船にて麥酒びいを少し飲みしかどこの船にて
は麥酒も飲まず

樺太に來て消えはてしまぼろしを育はぐくむ思ひ
無きにもあらず

いろ赤くたなびく雲もあらなくに天の原遠く
暮れにけるかも

山 南 下

八月二十一日午後九時四十分、稚内を發して旭川にむかふ。翌二
十二日午前六時旭川に著けば、兄富太郎志文内より來り會しぬ

つかれつつ汽車の長旅ながたびすることなもわれの一生ひとよ
のころとぞおもふ

よる一夜おりのしづめる雲ありて天鹽のくに
を汽車はくだりぬ

よるの汽車名寄をすぎてひむがしの空黄にな
るはあはれなりけり

山々に光さしくるいとまありて空はひととき
赤羅ひくなり

やまめ住む川のながれとおもふさへ身に沁む
までにわれは旅來ぬ

夏ふけし石狩のくにのあかつきは雲はれし山
雲のゐるやま

朝寒をあはれとおもひ吾汽車のしめし玻璃窓
に顔を寄せつつ

層雲峽

八月二十三日、層雲峽に遊ぶ。守谷富太郎、高橋四郎兵衛、石本米藏同行せり。ゆふぐれてひと夜やどりぬ

朝日岳十勝岳見ゆみんなみに石狩岳はかた寄り
りにけり

愛奴語あいぬごのチャシは土壁どへきの意味にして闘たたかひのあと
残りけるかも

愛奴等のはげしき戦闘たたかひのあとどころ環状石は
山のうへに見ゆ

たけ樺かんばいちるとど松蝦夷松の樹こむらを見つつ
山に入りゆく

とりかぶとの花咲くそばを通りつつアイヌ毒
矢のこを言ひつつ

蜥蜴いでて赤蜻蛉くふさまを見つ互かたみに生くる
ものかなしさ

病兵びやうへいがここに來りてしづかなる山の朝よひを
歩みつつ居り

みなもとはかかるすがしきたひらなる小谷こたにに
あふれみづは湧きたり

ふりし木に生おひたる苔こけをやさしみと手にとり
見つる山はふかしも

山がはに倒れおちいりしとど松にみなわ逆さかま
き身に沁みにけり

山がははきのふもけふも濁らねどゆたけく岸
の木賊ひたせり

波だちて瀬々のつづける山がはに砂たむろせ
る浅岸あはれ

山がはのみづの荒浪みるときはなかに生くら
む魚しおもほゆ

ひとところ谷あかるきにそそりたつや巖のや
まをけふ見つるかも

山がはの音をしきけば底ひより鳴りくるごと
し山がはのおと

黒巖に水しみづるを見たりけり人のくるしき
こころ絶えつつ

とど松の木下やみよりいでくればおもく聞こ
ゆる水上のおと

山がはに倒れたりける太樹々が浪をかぶるを
見つつゆきけり

海に入る石狩川のみなかみはかかるはざまを
ながれたるはや

いつしかに谿みづほそくなりゆけど木の下や
みにしぶきあがれり

宋人がさびしみしごと山のうへより音の聞こ
ゆる瀧見つつをり

ゆふぐれの道をいそぎぬ谿のそら北へひらき
て黄のくものいろ

層雲峽より深川

このあさけ起きいでて見ればまながひの桂月
嶽に雲はうつろふ 八月二十四日

よべひとよ谷にみなぎりし白雲の動きそめつ
つ鳥が音きこゆ

せばまれる谷の空はれて虚しきにひびきを擧
げて浪は疾しも

いそがしくわが目のまへを流れたる丸太はひ
とつ見えなくなりつ

川上のいづらの山とおもほゆる雲ふかきより
流れくるもの

山峽やまがひはせまくなりつつむかうより盛りあがり
くる浪は白しも

おのづから一夜ひとよはあけて山峽やまがひやはらから三人みたり
朝いひを食ふ

兄も吾も心したしくもの言ひつ石狩川のみづ
に手ひたす

深川

山鳩はすぐ真近くに落葉松からまつの林のなかに居て
鳴くらしも 八月二十四日鬼川氏を訪ふ

くれなるに色づきながら生なりてゐる林檎りんごを食
ひぬ清すがしいひて

三人^{みたり}して林檎^{りんご}の園^{その}に入りて來つ林檎のあひを
潜^{ひそ}りてぞ行く

降りつぎし雨の晴れまに人居りて音江山^{おとえやま}べに
麥刈りにけり

音江村の高きに居ればとほどほに石狩川^{いしかりがわ}のう
ねりたる見ゆ

狩勝を越ゆ

降りつぎしひと夜^よの雨の晴れしまの石狩川^{いしかりがわ}は
浪だちながる 八月二十五日

息^{いき}つめてわれの見おろす空^{そら}知川^{ちがわ}石狩川^{いしかりがわ}の濁り
浪はや

狩勝へいまだほどある行方にしおもおもと雲
とづる山あり

にこり浪あげくる流見えなくに空知川のみづ
林をひたす

まぢかくを空知の川の川浪はしぶきあげつつ
流れゆく見ゆ

高山のうねりの間を過ぎ來しが分水嶺を此處
にして越ゆ

寒き風嶺に吹きつつ空知がはの源となる水は
濁らず

ふく風になびく山草見えながら谿川細くなり
まさりけり

狩勝の峠にうごく白雲はここに極まり嶺こえ
なく

のぼり來し汽車のけむりは高原の木々にまつ
はり消ゆるまのあり

くもり風いまだ吹けども狩勝の分水嶺はきは
まるらしも

八雲よりいづれば十勝國原の目ざむるまでに
雨晴れむとす

狩勝の峠こゆればみち足らふ山川青し晴れに
けるかも

くにざかひすでに越えたる窓ちかく異なる水の
たぎちの音す

釧路途上

帯廣を汽車いでてよりややしばし東のかたに
虹たちにけり 八月二十五日

汽車とほる近くにも野がひの馬が見ゆ草食む
馬を見らく樂しも

帯廣にて士官あまた乗り池田にて獸醫總監が
ひとり乗りたり

空はれて十弗驛を過ぐるまで十勝の川は光り
つつ見ゆ

落いちめん^に谿をうづめて繁る見ゆ海岸離れ
狭間路ゆくも

釧路

この旅館に部下をつれたる陸軍の獣醫總監も
やどをとりにたり 八月二十五日二十六日

北國の釧路の町はともしびもあかあかとつき
にぎはふところ

標茶より來れる友と床ならべて愛奴のはなし
幾つも聽けり

朝はやきちまたはすすし赤蟹の大きを積みて
車が行くも

ふかぶかと轍のあとのめり込みしよひ闇の町
とほりてゐたり

ぬばたまの夜のくらきにとどろける釧路の濱
もわが見つるかも

闇ふかき海に對ひて潮鳴ききつつ居れば寂し
きものを

燕雀の一座來りてよひ毎に釧路の町に人とよ
めけり

阿寒湖行

秋にむかふ野をよろしみとあらくさの秀づる
かぎり秀でつるもの
八月二十六日二十七日

釧路野に咲きつづきたる秋花を馬食むらむか
飽かむともひて

阿寒湖をさしてわがゆく涯とほく蘆が花さく
釧路野を行く

釧路路の秋野のあひに畑ありみじかき蕎麥は
花さきにけり

みづうみは高きにありて雌阿寒のやま雄阿寒
のやま海霧ぐもりせり

みづうみの岸の木立より飛びしもの鷹とこそ
いへ忽ち見えす

舟に乗りて阿寒の湖を漕ぎためば思ひも愛し
この縁はや

寒ぐにの山にしあれや樹立さへ荒く立枯れし
ものも交れり

阿寒湖の島の木立に蟬のこゑ聞こえつつ居り
ときどき中絶ゆ

湖ぞこに毬藻の生ふるありさまを見むと思ひ
て顔を近づく

一たびは見むと思ひてあひ見つる雄阿寒の山
雌阿寒の山

雌阿寒の火を吹く山に人おほくのぼりて行く
にわれは行かぬに

阿寒湖のほとりにやどり幾たびも湧出づる湯
に入りて眠りぬ

雄阿寒の山に對ひてしみじみと吾は目守れり
かなしきまでに

雄阿寒の麓にいづる湯を見むと谿ふかくまで
下りて來たり

阿寒川のながるる谿を見下せり二たびは來む
われならなくに

吾辛の村をとほりて荷車の心を鍛ふる鍛冶を
見て居り

根室途上

陸も海も靄のくもりのかかりたる今朝の朝け
を東へむかふ 八月二十八日

山ひとつ見えなくなりしくぐもりの深き際涯
にあまつ日はあり

ときのまに魚を干したるにほひ来て厚岸灣は
 近くに見えぬ

右^{みぎ}にはくろぐろしたる森林^{はやし}あり遠くつづけば
 起^{おき}伏^{ふし}もなし

放牧の原に沁むまでに靄^{はら}かかり馬居りながら
 海につづきぬ

わが汽車の落石^{おつちし}ちかくなれるころ小灣が見ゆ
 異國^{いこく}のごとし

蝦夷松の暗き山こえわたつみの海におちいる
 狭霧^{さぎり}は疾^{はや}し

海ちかき山の中なるみづうみの高き^{たか}港^{みなと}を汽車
 より見たり

ふかぶかと松かこみゐる高原たかはらに牛百あまり居
り旅を來にけり

みづうみの水に生ひたる水草みづぐさのかず限かぎりなきを
見つつ過ぎたり

岬みさきより續ける陸くわのいくうねり牧まきの馬うまこそ見る
べかりけれ

根室

北ぐにのはての港とおもひつつ弟あにと二人ふたり街歩まち
き行く 八月二十八日

船中のエトロフ鱒ますの鹽づめのひまなる爲事しごと
立ちて見にけり

金比羅こへらの社やしろにのぼり遙かなる旅をしぞおもふ
靴をぬぎつつ

根室ねむろ灣わんの潮しほかせ吹くを見るまでに家いでて吾
は遠く來にけり

小さな鱒ます罐詰かんじつの會社あり働く作業を見せて
もらひぬ

旅たびびとの心こほしく白雲をかむれる山は國くに後ご
千島ちしまの山

グロナー機はたけふあたり此處こゝに著つくべしと稚兒をさなご
どもは言ひつつ行けり

北きたぐにの港みなとに來つつ或る時は昆布倉庫のりくらを窺のぞき
つつ居り

飲食店ならべる町をたづね来て卵とち蕎麥ふ
たりは食ひぬ

海濱に因縁の小石拾はむと暫し行きしが思ひ
とまりぬ

くれなるに色づきし茶菓の果を買ひて根室を
去らむ汽車に乗りたり

旅小吟

八月三十日、札幌西本願寺別院にてアララギ歌會を開く。即事四首

夏ふけしみ寺の庭におのづから杏子落ちる
も親しからずや

旅たびとほく吾われは來きたりてしづかなるみ寺てらのなかに
友ともとあひ見みむ

庭には苔こけのしめりのうへに來きたつつ鳴なくこほろぎも
がもこころ足たるがに

札幌さっぽろのみ寺てらに友ともとあひ語かたり雨あめふりしづく頃ときに
わかれぬ

石狩川

八月三十一日、雨大に降る。札幌軌道株式會社の電車に乗りて茨戸いばに著つけば、其處より汽船にて石狩川をくだる

札幌さっぽろを立ちいで來きたれば街まちほそりて馬宿うまやどあり遠とほき旅たびのしづかさ

青々としたる田中に兵村のなごりの家居ひと
處見ゆ

川浪のあかく濁れるいきほひに汽船に乗りて
下り行きけり

船乗り場バラストといふ名も石狩の川岸にあり
ていにしへおもほゆ

くる雲は疾くうごく見えしかば石狩川に雨
ふり亂る

河の汽船に乗りあはせたるものながら處々に
人は降り行く

たひらなる陸をながるる大河はほしいままな
るものにし似たり

はるかにし濁れる河や見とほしの岸低くして
丘さへも見ず

おのづから直線にながれぬ大河や一たびうね
りいや廣らなり

わたつみの海に近づく石狩川かすかぎり無き
浪たちわたる

目を繼ぎて石狩川の濁るとき恐ろしきまでに
岸をひたせり

國はらを断ちてながるる大さ河海近くなりて
かかるゆたけさ

かきくらし雲ひくきなべに川浪の立てるが上
を鳥いそぐ見ゆ

海ちかき石狩川のにごりなみ見れども飽かず
あはれ旅びと

船のなかに臥しつ居れば石狩の濁れる浪は
天の中より來る

わたつみに石狩川の入る見れば大どかにして
濁りうごくや

石狩の川口ちかく鮭といふ魚幾萬となく人に
捕はる

つづきたる砂丘の上に玫瑰の熟れそめし果を
食ひつつ行けり

そのかみに榮えし町の石狩はものひそけきに
行きもとほろふ

道廳孵化場

この山に澄みとほりたる水わけばきよき水に住む魚をはなちぬ 九月一日

人工の受精をはりて二月めに幾萬の魚か此處に孵らむ

かくのごとさやけき水が湧きいでてをさなき魚を暫しとどむる

孵化場の魚を襲ふものに梟も鳶も鷹らも居りところ聞け

あめ鱒ら紅鱒らやまべひとときに餌を食ふさまぞかなしかりける

支笏湖途上

孵化場をいでて來れば流れ居る水のいきほひ
に小魚し思ほゆ
九月一日

藪のそばに愛奴めのこの立ちゐるを寂しきも
の如くにおもふ

木群ある澤となりつつむかうには愛奴の童子
走りつつ居り

こもりたるしづかさありて此澤に愛奴部落の
あるを知りたり

自動車を熊がふりかへり見て過ぎし話などし
て山を越えたり

すさまじくあつまり落つる水をしぞ心たふぶり
て見おろしゐたる

さかさまに直たださまに水落ち居るを瀧にはあら
ぬものとおもひつ

おのづから暗きしげりと茂しげりたる林のなかに
入りがてなくに

北海道の山やま中なかにありてわが時計を震災記念の
時間とあはす

支笏湖へ自動車道路つかぬまに吾等きたりぬ
心たらひて

ひと山の羊し齒だの茂りも心ひく支笏の湖うみにくだ
りゆくころ

支笏湖

七^なたりが支^し笏^こ湖^こに來て立ちながら見て居たり
けり降りみだる雨 九月一日二日

白雲のひろごりはてしとばかりに冷^{つめ}たき雨は
湖^{みづうみ}に降る

みづうみをよろふ山々隠^{かく}ろひて白雲のなかの
雨としおもふ

ひといろに雲とちゆきし湖^{みづうみ}の空^{そら}のまほらより
音たつる雨

おぼほしく見るものもなき天^{あま}の原^{はら}みなぎりて
雨はみづうみに降る

ふる雨を見つつし居ればみづうみの汀なぎさの砂すなの
はねあがるまで

新しき風呂に入りつつ支笏湖に雨の晴れゆく
雲を見てをり

雨ぐもの動きそめたるひむがしに浅黄あさぎの空そらは
はつかに見えつ

みづうみに對むかひてをればそき山のひとところに
いまだ雨の降る見ゆ

支笏湖に幽かに生きてゐる蝦えびを油にあげて今こ
宵食よひひたり

年わかき愛奴がひとりこの家に雇はれ居りて
萬事まめまめし

支笏湖の黒く澄みたるみづを見てわれは和む
心極まるまでに

しぶき降りし雨晴るるなべに青山がこの湖を
圍みて居りき

みづうみに迫るがごとく見えそめし檜前山の
赭きいろ見ゆ

支笏湖を漕ぎたみゆけばおのづから恐ろしき
までに水は澄みたり

空はれて白老山も見えしかどなほ奥處なる山
ぞくもれる

一夜明く(九月一日)

みづうみの朝の水際みぎはにわが來ればいつしか山
に日當りて居り

罪の無き人のごとくに起きいでてつめたき湖うみ
の水に手ひたす

朝あけて樽前山ゆ立ちのぼるけむり時のまは
直ただになりたり

みづうみの涯はたにかすかに見えにけるオコタン
の湯は行きがてなくに

あかつきの湖うみのほとりに聞こえる鳥とりが音ねと
ほしうすら寒しも

みづうみにそばだつ山の背せをつたふ白雲すで
に沈みそめたり

青山にこごりながらに朝あげてうつろひ行か
む雲はおもむろ

みづうみの朝のいさごにおりたちて人の世の
受くる苦しさもなし

湖じりの水をし見ればうたかたの消えつつぞ
ゆくかつ結びつつ

苦小牧

白老山樽前のやまフウプシヌプリ恵庭の山脈やまなみ
あらはになりつ 九月二日

ここにして恵庭の山はか青きにいただき近く
木の無きが見ゆ

樽前のけむりのさまが時々にかはりつつ居り
此處より見れば

製紙場の作業のさまを見まはりて山を旅來し
われぞ驚く

木材より紙になるまでのありさまがただ目の
前にあらはるるなり

白老

うすら寒く雨降りしきり砂すなに沁しむ白老しらおむらを
歩あるきて行けり 九月二日

白老の愛奴おんな會長の家に來て媪おんな若きをみな童女わらわめ
に逢ふ

白き髯ながき愛奴の翁ゐて旅こしものを怪し
 まなくに
 口づから古きときより傳へたるメノコの唄は
 悲しきろかも
 降る雨を見ながら黒く煤垂りし愛奴のいへの
 中に入り居り

過ぎ去りし時代のままに起臥して山ゆくとき
 は猛々しとぞ
 しぼりたての牛の乳のみ出で來しに一時間に
 して腹をくだせり
 この丘に秋きたりぬとおもふにし蟋蟀鳴きぬ
 いまだ幽かに

登別

登別のほりべつにひと夜やどりて寄りあへる湯治たうちの客の
なかに親したしむ 九月二日三日

登別に飼ひゐし熊を見て居れば山のままなる
熊しおもほゆ

刀抜きて舞へるアイヌがうたふこゑわが目の
前に太ふと々と鋭とき

いくつにも小山こやまうねりて入る谷に白き山あり
て音ぞきこゆる

あかあかと色ただれたる山は見ゆ谷よりいづ
る烟けむりなづさふ

あゆみゐるわが足元にかすかなる砂うごきて
いぶきの音す

小火山の群落を見る思ひして大湯池まで山に
入りゆく

酸きけむり谷をこめつつながれにはいろくづ
一つゐることもし

車房漫吟

九月三日登別温泉をたち、登別驛九時七分發、長萬部行の汽車に
乗る。車房雜吟。大沼公園を見、函館に著く

馬も牛も雨に濡れつつゐる見れば長雨ふりて
秋立つらむか

清き川が海に入りゆくところなど見えつつ磯
に沿ひて走りぬ

なぎさより直ぐに續ける沼ありて青々として
草しげる見ゆ

ワシベツといふ海岸の村見えつ小山のすそに
潜ひそむがごとく

青々としたる低山おきふせり山のそがひは海
なるらむか

室蘭の製鋼所より立つけむり室蘭の町を見る
時間じかん無し

忽ちにせまき谷た合あひとほり過ぎベンベの浦の海
にござりたる

白浪のとどろく磯にひとりしてメノコ居たる
を見おろして過ぐ

鷗らが驚くばかり數むれて海のなぎさに居る
ところあり

狩^{かり}のうみ
禮^れ文^{ぶん}華^げの連続したる隧^{とん}道^{ねる}をやうやく出でて靜^{しづ}

隧^{とん}道^{ねる}をいでて明^あるき峽^{かひ}の空^{そら}部^ぶ落^{らく}のうへに海^{うみ}の
潮^{うしほ}みゆ

旅とほく來つつおもほゆ人の生^いくるたづきは
なべて苦しくもあるか

長^{おし}萬^{やまん}部^べの驛^{えき}に下りたちいそがしく停車場に賣^う
る蕎^{そば}麥^{あわ}を食^くひたり

わたつみの海より直ただに秀ひでたる駒ヶ嶽見れば
前山まへやまもなし

片がはに草木生ひつつ駒ヶ嶽の裾野は引きて
海に入る見ゆ

二つ峯もちて鋭すどき駒ヶ嶽北より來つつ振りさ
けにけり

駒ヶ嶽の裾野は引きてひろければ柏かしはの木立こたち幾いく
里りつづきぬ

常つねならぬ空合にして駒ヶ嶽の西のおもては黒
雲とぢぬ

おのづからめぐり來れる裾野なる防雪林に汽
車のけむりかかる

湯川即事

九月四日高橋四郎兵衛とともに函館市外湯川温泉にやどりぬ。武藤善友君等會す。雨大に降る

しほはゆき湯のたざり湧く音ききて海まぢか
しとおもほえななくに

牛の乳のきよきを盛りし玻璃あれど腹いたは
りて飲むこともなし

ロシアびとひとかたまりに住みつきて街のか
げなる家等はひくし

魯西亞人のひとつの家族はこの夏も胡瓜の罐
詰つくりて業とす

魯西亞人が移住して来てすぐ建てたらしき黄いろの家もいまは古りたり

うすぎむき街をしゆきて馬の薬うる家のまへに足をとどめつ

しほはゆき湯にあたたまり久にあひし友の體を見をる親しさ アララギ歌會

十和田湖

九月五日、飛鸞丸に乗り函館出帆、青森著。汽車にて古間木驛下車、三本木より乗合自動車にて十和田にむかふ。六日午前十和田にあり

奥入瀬の川浪しろくながるるを幾時か見て國のさかひ越ゆ

この谿たににわきかへりくる白浪しらなみを見つつ飽かね
どわれは去りゆく

ひむがしへふかき奥おいらせ入瀬いりせの谷間たにまよりあふれみ
なぎりし湖うみのうへの雲

みちのくの山に入り来て浅川あさかはにながるるみづ
もかなしきろかも

ひがしより霧わきあふれかくろへる十和田とわだの
うみの奥處おくがしらすも

ゆふやみになりしみづうみの木立こだちより黒鳥くろどりの
鶺鴒うづらはみだれて飛びぬ

みづうみの夜のほどろには遠くとほよりふるひく
る地震なみをひとり聞きにき

アメリカの女旅人をみなたびととつれだちて目下ましたに赤き巖いは
を見おろす

現身うつしみに沁むしづかさや旅ながら十和田とわだの湖うみに
われは來にけり

むらがりて鶴のすむ山とおもほえずみづうみ
のなか中に舟をとどむる

よもすがらみづうみのなかに降りし雨あかと
きがたに聞きこえずなりぬ

朝あけて十和田とわだのうみを弟おとうとともとほり居りて
母をしぞおもふ

夜もすがら降りみだれたる夏の雨湖うみのなぎさ
をおほどかにせり

みちのくの大ききみづうみのよひ闇は雲とちに
けり低山も見ず

あさ明けしうみの低空をひとしきりくびをの
ばして鶺鴒のわたる見ゆ

東谷よりひとときにしてあふれくるさ霧は湖
のうへにたゆたふ

湖ふかく魚は棲めども悲しきや魚おそふもの
の時なかりけり

はしばみのまだ小さきを手にもちて湖の岬の
木立に入り來

うごきゐる雲にまじはりて見るときぞ十和田
のうみはゆゆしかりける

嘴ながく飛びゆく鶴等を見てをればところ定
まらず水にしづみき

みちのくに雪ふるころはこの湖の鶴のとりも
なべて南へぞ飛ぶ

山鳩のこゑはさびしく聞こえ居り道はやうや
く高しとおもふに

芸香草

けふ見れば机にかぶせおきたりし風呂敷のう
へに塵つもりけり

午前より疲れしならずとおもへども身のおき
どころなし雷鳴るらむか

土屋君が心をこめて養ひし芸香草をくれたま
ひたり

山水圖は楽しくもあるかこの身さへ山のそこ
ひにかくるるごとし

この朝や露さむくなりて胡頹子の實のやうや
く赤しわれはかなしむ

朝日かげ

てらす日の光しづかになりゆくとき草むらな
かに蟲はおとろふ

きびしかりし暑さをぞおもふ朝日かげふかく
疊にさすを見につつ

わたりくる雁もきこえぬ東京の空そこはかとなく日はくれにけり

濠のみづよりいま飛びたちし鶴ひとつ高空こえて行くとおもほえず

北ぐにの旅よりかへりものわすれしきりにし
つつ爲事すわれは

寒霧

十二月の言葉 (七首雑誌日の出のため)

高山のいただきにして雲みだる明日さへ晴れば白くかがやかむ